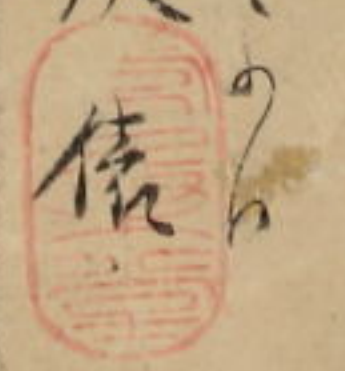


俵
借
七
部
集
注
解

妻の
り
の
名

炭
俵



有韻

初表八分七寸十日

寸七分十日

寸五分十日

名寸七分十日

初仙形表八分七寸十日

名寸七分十日

也也表八分七寸十日

寸七分十日

也也表八分七寸十日

寸七分十日

名寸七分十日

除氏也表八分七寸十日

寸七分十日

名寸七分十日

初表七分九寸十日

寸七分十日

寸五分十日

名寸七分十日

表七分九寸十日

名寸七分十日

表七分九寸十日

寸七分十日

表七分九寸十日

寸七分十日

名寸七分十日

表七分九寸十日

寸七分十日

名寸七分十日

表七分九寸十日

寸七分十日

名寸七分十日

本字「表八白七白目

表十白七白目十白十花

字十白七白目

字十白七白目十白十花

字十白七白目

字十白七白目十白十花

名十白七白目

名十白七白目十白十花

六白「表十白七白目

表十白七白目「表十白七白目」右一折

七白「表八白七白目」表十白七白目十白十花

名十白七白目「表十白七白目」右一折

經「表八白七白目」表八白七白目十白十花

名十白七白目「表十白七白目」右一折

字十白七白目「表十白七白目」右一折

冬百

和漢 漢和 和の漢の字

漢の字は毎に表の字有りし和の漢の字三白迄

連句切後し

表八白七白目十白十花

表十白七白目十白十花

表十白七白目十白十花

まじりておぼろなる
名吉屋 杉木町の
後 官ノ 驛の 邊
田居し

曙をん人く乃戸抄あり
執内のかきゆきな 漸 舟にいし
くたゆゆに 舟のりて
いのりなりきち 枝折をき
竹 檣たけちりきりし
まじりておぼろなる

まじりて

貞享三年丙寅年

七板

まじりて山波の
一時のりて
夕月夜の光景を
かく奇なり

二月十八日



荷分

まじりて人まじりの伊地
さきりてあまの馬あまの連
山くまの月一耐い鼓こを
鎖ありて火のあまの
しも風まじりてやの
くまのりて乃石ありて
執筆

まじり

雨桐

李凡

昌圭

執筆

何

は節をまきすの節

文の上節竹に下代
をPのPの

詩に大雅の詩を
引く(さき)

其意を大雅の詩に
引く(さき)

角のあふまを
奈とん(さき)

心子のあふまを
とす(さき) 角のあ
と(さき)

此社を勸園の情
とす(さき) 角のあ
と(さき)

麦のあふまを
近平の梓(さき)
とす(さき) 角のあ
と(さき)

頃(う)にさし行乃惟子院之舞

を此くあふまをい

文(う)のたふ(う)もさけ

雨のま(う)此(う)角(う)り

似(う)ま(う)一度(う)も骨(う)を

傾(う)城(う)刻(う)ま(う)か(う)す

方(う)た(う)子(う)院(う)の(う)歌(う)う(う)

と(う)中(う)し(う)乃(う)神(う)連(う)う(う)星(う)

晨(う)明(う) アリアケイノヨミテシナレドアリアケイトヨコシ
月(う)ニテラスナリ

分(う)取(う)る(う)年(う)取(う)る(う)角(う)川(う)を

節(う)の(う)長(う)野(う)の(う)竹(う)を(う)あ(う)ら(う)る(う)

柳(う)の(う)院(う)を(う)さ(う)ら(う)る(う)鞠(う)を(う)や

入(う)る(う)海(う)日(う)の(う)桂(う)を(う)さ(う)る(う)

月(う)の(う)あ(う)ら(う)る(う)あ(う)ら(う)る(う)連(う)結(う)

心(う)の(う)懐(う)子(う)梓(う)を(う)さ(う)る(う)

忍(う)針(う)を(う)た(う)て(う)ぬ(う)る(う)切(う)針(う)

い(う)も(う)か(う)し(う)き(う)ち(う)の(う)針(う)を

を

荷

孝

雨

荷

昌

雨

を

昌

孝

を

荷

孝

雨

荷

昌

五位と云ふ
言司と云ふ

落高此格を
左中助
此おの格
上二
大印

貞享元
西川
附
此局
中納言
高倉
天龍

桐の本子
門
此
此
此

雨桐

念
此
此
此

李風

穂
此
此
此

李風

象
此
此
此

李風

今
此
此
此

李風

於
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

此
此
此
此

李風

唐子子留 くれと去一た班ツ子三格

うらるる

さくらさくらさくらさくら

清明と紫さくらさくらさくら

山伏さくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

せーけーけーけーけー

おもしろいおもしろい

三月六日野水亭

目下亭

春言坂名歌長坂
と笑はるる道言言
此名木多し

さくらのさくら

さくら

さくらさくら

さくらさくら

さくらさくらさくらさくら
さくらさくらさくらさくら
月さくらさくらさくら
月さくらさくらさくら
おもしろいおもしろい
おもしろいおもしろい

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくら

野水

荷兮

越人

羽笠

靴子

山城唐津と幸懸村
南に... 月...
上... 既...
牛...
恙...
吹...
...
敵...
...

回國の人此より

敵...
...

万...
...

飛...
...

君...
一句...
...
...
...

山...
...
表...
...
...
...
...
...
...
...
...

大...
...

大いなる風とあふる恵美須原棚 且草

これこそとて家より記蹟に 越人

新ノ此いんふふのこあま句抱えそ 荷子

言古に廿日ちやま、夏に於 羽

一程より名を馬子寺を此や 明水

視 かりるま、此の月 且草

陽 炎のあふるま、又好きて 越人

袖より奇しいたて 荷子

五コヤシシ

二尺

けりしよ記蹟同利を
えい信つし四巻を

神方より六巻を
一年より及記蹟

其一ツシ

けりしよ記蹟同利を
えい信つし四巻を

後たる天皇大伴の王子に於て
己むしよのそふし 志のこころ

此何國柄の翁葉の山形に
つよも更をも世御は侍

天皇御創

つよのまのまのまの

まのまのまのまの

まのまのまのまの

花のまのまの

つよのまのまの

西伴元十ニ秋日記
十月廿九日の早天

箱根の山に於ける
廿九日の早天の早天

又とてしよのまのまの

田を打てむはるるを 羽

まのまのまのまの 明水

健也三井のまのまの 且草

言いくるまのまの 越人

又つるまのまの 荷子

まのまのまのまの 羽

西伴元十ニ秋日記
後たる天皇大伴の王子に於て
己むしよのそふし 志のこころ

此書月回あしるふ飯より 月事記様も月事記を以て
又信在三月廿三日向月事記を以てしり也又月事
神といふ事ありしりし事也又月事記の月事
又月事記の月事記を以てしりし事也又月事記の月事
又月事記の月事記を以てしりし事也又月事記の月事

顔とあな

凡人世の顔と人世の顔
と云ふは又や
と云ふは又や
と云ふは又や
と云ふは又や

三月十日旦臺の向家子

と云ふ

水

陸乃と云ふ事や一と云ふ事也
顔とあな 且事

岩本と石床
岩本と石床
岩本と石床
岩本と石床

此歌意は山石本の長き宿りて 越人

牛と云ふ人をも云ふ事也 荷子

と云ふ乃と云ふ事也 舟の月記子 文

舟の船を以て 命の 端 執子

と云ふ事也
と云ふ事也
と云ふ事也
と云ふ事也

夢の白く海を渡り
志願の舟をこぎ
けいこふるこし 陶器
を創るの志願地
に

白く
けいこふるこし 陶器
志願の舟をこぎ
夢の白く海を渡り

夢の白く海を渡り
志願の舟をこぎ
けいこふるこし 陶器
を創るの志願地
に

磯原の鰐鯨鬼の傍に集りて 旦臺

石のあしむる蔵 三浦の里 明水

西のりも 舞やぐら 燈台の 荷台

ひらけさるも 旅乃一泊の 越人

尋ふ坊主を 任に渡りて 明水

あてをえん 枝をよみ 松 冬文

今更なるもやま

白く海を渡り 志願の舟をこぎ

嘆けの菊をきり 白あそ 純人

秋の和名よ 一葉の 順 旦臺

初原の春よ 一葉の 冬文

別の月よ 一葉の 荷台

あそ 夜回か 一葉の 旦臺

長り 通の 一葉の 明水

永きりやと 一葉の 荷台

笑乃子 一葉の 純人

嘆けの菊をきり 白あそ

秋の和名よ 一葉の

初原の春よ 一葉の

別の月よ 一葉の

あそ 夜回か 一葉の

長り 通の 一葉の

永きりやと 一葉の

笑乃子 一葉の

白く海を渡り 志願の舟をこぎ

武内伊弉册信入所
大尾彦経政の号は
東山殿に仕へて奉事
しり 利休の所りて
正田信孝の官に隣
有らんとす

けしき
又も
早入

丹波妙法
民部卿
既つ
水

浪政、
宗
舟
荷

連
乃
舟
舟
舟

流
舟
舟
舟
舟

岩
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

水
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

舟
舟
舟
舟
舟

とく

右二句一葉の拾

秋のつらさの声もあはれなる

花の香もあはれなる

花の香もあはれなる

右二句一葉の拾

追加

三月十九日舟泉亭

越人

山吹のあはれなる声もあはれなる
 水はあはれなる声もあはれなる
 まはあはれなる声もあはれなる
 行幸のあはれなる声もあはれなる
 朝のあはれなる声もあはれなる
 月があはれなる声もあはれなる

舟泉
 聴雪
 各路
 荷今
 執子

比叡宮をす遊宮をす
 比叡宮をす遊宮をす
 人教授え人も一月
 了美化せし

此後治を次承りて是月も一月の間に
何れの説にさし

昌隆ハ里村氏連言
名の下に元和の事あり
年二月十日の落句
と云ふこと作は眼と銘を
元此句破りて云ふ

勲の抄本を云々
何れと云ふこと

貞徳の別名方集
と云ふこと

白氏文集

梅苑歌詞輕魚
入龍門

春

春

本朝の門下の本の間に於て

昌隆の撰に云々 御代

元此本のつらり懸る事ゆへに

初まの事とて牛此の事

此の事とて海を云々の事

門下の事とて重國乃云々の事

輕の事とて水乃云々の事

舟の事とて小舟を云々の事

春

昌

雨

舟

羽

且

之相の早天をのり
明の人の雨たを
牡丹の後のまを
余程のつらさ

白民天年
暖林針計日照腰

そのよきを牛の
りよきを牛の
のよきを牛の

る世のつらさ

鳴の人数 牡丹 家子 びさき

偷のつらさ 里の 睡り 山

そらうく 山 牛の夏

れよきを牛の夏

新の二分 柳乃 新く 自を 山

先月 予 山 山 山

奇 痛く 山 山 山

山 山 山 山

杜四

屏て

春霞

酸を

山字

同

且菜

吉池の句を
いよきを牛の
のよきを牛の

名 山 山

見えき 山 山 山

吉池や 蛙 山 山 山

今年 張の 睡り 山 山 山

山 山 山 山

山 山 山 山

春野吟

只 山 山 山 山

山 山 山 山

越人

芭蕉

山字

亀洞

越人

杜國

山風

九

山 山 山 山

櫻木を楳の邊にありて 荷守

談列

蘇のしきく月ふり別れ 越人

山烟の葉ををばり若れ 子五

改て月を宿るをぬ夜はるの暮 同

友

た〜〜〜山馬北尾に 九白

竹をほけてなるは 七
そ〜〜〜を云り

郭公さゆ乃を焼くぬ夜に 安凡

かつと鳥板屋乃春さの一里塚 越人

ふ〜〜〜が九折の川に 杜國

あけ乃〜〜たす花に 亀洞

命をきくすも量る深淵に 舟泉

武花坊をよみ 好

た〜〜〜や〜〜の衣川 高露

逢坂乃柳をよみ 中 〰

友

た〜〜〜名小ま〜
し〜〜

十一
あめつらやまかやまか
まのつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか

あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか
あめつらやまかやまか

馬くくおくれうりうり五月

老冊老子ノマツリ曰知足之足常足

夕くくく難炊ありききき
越人

十一
第本り微雨こをれき
柳雨

けくくくくくくくくく
唐文

萱草ききききききき
荷今

蓮池の池ききききき
同

曉乃夏陰至尾此
昌士

夏川乃音ききききき
きき

辟言ヒキコト勸品コト三思ミコト無女メコト猶如コト

火宅ヒヤクといコト子コト女コト

六月ウラナにコト行コトぬコトるコトをコトぬコトるコト
越人

秋

背ウラナよりコト此コト烟コト菊コト子コト黄コトをコトぬコトるコト
且臺

美家ウツクシの玉タマ象ゾウ

玉タマ中ナカのコト香カ櫃ツツこコトむコト子コト々コト々コト
越人

秋

西上人
中へ下りてはるのちの
月をまじりてはるのちの

志
凡やあこちの
言はれぬ

十五
見よとてはるのちの
月をまじりてはるのちの

所きくはるのちの
雨柯

志
おろく人をまじりてはるのちの
芭蕉

心ちよはるのちの
越人

志
雨やあこちの
水

八鴻をかきとる凡の

十五
見よとてはるのちの
舟

待志

あめあきとてはるのちの
荷兮

閑居増戀

秋ひつ 琴ねとてはるのちの
荷兮

秋ひつ 琴ねとてはるのちの
舟泉

か

志
馬をまじりてはるのちの
杜園

芭蕉翁を初

志
おろく人をまじりてはるのちの
如行

志
おろく人をまじりてはるのちの
昌珮石

志
旅人の心をまじりてはるのちの
舟泉

十七
きの上

志
おろく人をまじりてはるのちの
昌珮石

夏光
世に於ては...
そのまゝれと...
まうあれたれ...
すく地...
て海山...
の秋...

馬をさく...
芭蕉

河燈の...
越人

色...
かつ...

この...
杜國

隠...
...

あ...
荷号

七部...
...

井...
...

又...
...

翔...
...

ま...
...

貞...
仲秋下院

許...
...

その日...
...

け...
...

竹...
...

江...
...

心...
...

秋...
...

...

...

...

...

...

野々の花多
一しんも
東氏の句
えんをまじり
そらりし
はま

山並みの花は
さしゆまの
てしゆまの
こしゆまの
ましゆまの
ましゆまの
ましゆまの
ましゆまの
ましゆまの
ましゆまの

諸元
りれいの

可成狭い水もモント
物後
た

心
と
は
お
け

打句の
照

お

芭蕉

例

水
都
元
五
五
五

朝
有
朝
有
朝
有
朝
有

正平

杜國

唐言ハ萬言 萬國ヨリ来ん

故ニ名ク白言ヨリ失レリ

骨カ何ト云フコトナリヤ
人の骨ト云フコトナリヤ
甲シ之の甲ト云フコトナリヤ
夫心ト云フコトナリヤ
胡國ト云フコトナリヤ

胡人ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

宗祇の言ハ云フコトナリヤ

骨カ何ト云フコトナリヤ

人の骨ト云フコトナリヤ

甲シ之の甲ト云フコトナリヤ

夫心ト云フコトナリヤ

胡國ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

骨カ何ト云フコトナリヤ

人の骨ト云フコトナリヤ

甲シ之の甲ト云フコトナリヤ

夫心ト云フコトナリヤ

胡國ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

胡人の名ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

注ハ牛の角ト云フコトナリヤ

居河の巻のふき風呂桶の柳の上の海柳よりよめをこめて
お二さまとていひていひていひていひていひていひていひて
お二さまとていひていひていひていひていひていひていひて

一書に居河の御下は古塔の空の
四行に...

大川

貞享元二之間尾張女奇仙の回

又送 振衣千仞回 九太付 杜詩 老大徒悲未拵衣

注 悲拵衣之未遂

け句官諺をいふの言
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

社名をいひていひていひていひていひていひていひて

お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

林水

お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて
お二さまのいひていひていひていひていひていひていひて

事林義経口或人伝同

法巧（抄）ちのほまの

田（抄）をこたへて

大朝（抄）のまゝに

つらもまこと

二五

二五（抄）初原の

次（抄）を

けは

るまの海まの

奥のまは

床を

孫を

口を

山三

月を

大将の

杜園

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

西島の藤原の

侍女

松屋の

松屋の

松屋の

松屋の

松屋の

松屋の

松屋の

海あけの

地

初

一

松

三

三

三

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

杜水

源因信長神皇御曆
 今自修中
 神皇御曆
 神皇御曆

神皇御曆 打らぬをさす

神皇御曆 七十 杜園

奉がくれ 下奉りて 五十 杜園

連比に 下奉りて 五十 杜園

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園
 神皇御曆 下奉りて 五十 杜園
 神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

又信三郎四月廿一
 後白河院 上皇御幸 山内
 甲訓言 後出 執筆 山内

後白河院 上皇御幸 山内

甲訓言 後出 執筆 山内

金持 後院 典侍 山内

去 後院 典侍 山内

神皇御曆 下奉りて 五十 杜園
 神皇御曆 下奉りて 五十 杜園

らう身替に...
けふは...
娘の...

後...
...
...

...
...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

豫州を渡す...
...

武村...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

老の壽を延べて、
 少の命を救ふべし
 此の國は、
 天の國なりと云ふ
 其の言を信じて
 此の國を治むる者
 必す此の言を守らざらば
 其の國は滅ぶるべし
 此の言を守らば
 其の國は長らく
 存するべし

神子に云く 戸神をまつ
 人の指を指す 吾をえ
 川のてらく子名をえ 禰
 三月の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事

此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事

此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事

秋湖三湖の事
 此の國の事を書き 禰の事

此の國の事を書き 禰の事

此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事

此の國の事を書き 禰の事

此の國の事を書き 禰の事
 此の國の事を書き 禰の事

かき川の土、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか
かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか
かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川と胡麻子代案やとと
いとくくくか
おもふこく
うんまをて
かき川と胡麻子代案やとと
いとくくくか
おもふこく
うんまをて

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川の上、福島の社
けしきも好ししとて
そはくきくきくか

かき川と胡麻子代案やとと
いとくくくか
おもふこく
うんまをて

かき川と胡麻子代案やとと
いとくくくか
おもふこく
うんまをて

かき川と胡麻子代案やとと
いとくくくか
おもふこく
うんまをて

かき川と胡麻子代案やとと
いとくくくか
おもふこく
うんまをて

一葉白雲は山の清浄の如く
柳ありては山風の自れり
法然上人の法を説きし

皇行天皇六年天智天皇
六年後天智天皇の意
を説きし

人見白雲は世を賣女
の如く

法然上人の法を説きし
と云ふ

大和國竹林の殿
神武天皇の法を説きし

諸國に轉りて
法を説きし

法然上人の法を説きし
と云ふ

桂のたけの月し十をいふ月と云ふ七のひき

西南よりつづつと

羽衣

園の油をいふ

さき

園のあけの咲いふ

さき

河のあけの咲いふ

さき

河のあけの咲いふ

さき

河のあけの咲いふ

さき

河のあけの咲いふ

さき

河のあけの咲いふ

さき

ついでに
さき

いふ

河のあけの咲いふ

河のあけの咲いふ

河のあけの咲いふ

河のあけの咲いふ

河のあけの咲いふ

西洋病の
古説

天智一人の娘を
河南の

天智一人の娘を
河南の

日月のほひは圓月結ぶらのあしへてあはれなる
秋半散をけしむる白くもあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

貞享元二間尾張子三の仙三門

けねよまをま留のね

又いふまをま留のね
せぬまをま留のね

向言山家あはれ
秋奈尾あはれ
尾根

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

田家眺

霜月か鶴の行いあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

櫻槽山家り作を本北基路
あはれなるの日月とあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

あはれなるの日月とあはれなる
あはれなるの日月とあはれなる

有言

その日の南に序とつては...
家とくしとちと治下...
及作持力さ不三之の...
北西連の...
よま...
...
...

秋の了旅北西連...
...
...

よま...
...
...

...

...
...

...
...

義仲...
...
...

...
...

本...
...
...

...
...

...
...
...

...
...

...
...
...

...
...

...

相生...
...
...

...
...

...
...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

水...
...
...

...
...

あはれをいへて
あはれをいへて

ル一尾いふは丘尾)

ル一尾いふは丘尾)

ル一尾いふは丘尾)

ル一尾いふは丘尾)

ル一尾いふは丘尾)

とくにこの年のお角のたれ

お角のたれ

お角のたれ

お角のたれ

お角のたれ

お角のたれ

お角のたれ

お角のたれ

お角

お角

お角

お角

お角

お角

お角

お角

本和國... 上代... 遺風... 遺風をいへて

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

元は... 母れ

お角

お角

お角

お角

お角

お角

水子... 連環の場

水子... 連環の場

水子... 連環の場

美田の正と相向の連隊

牛の跡のあつた山

板屋

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

あつた日

這か

いづれか入ると誰か牛をうけ

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

杉の葉を海に桐をたて

羽

杉

桐

海

山

水

孫破は湖の人

子れは江南

孫破を江流の人

濱田氏酒造

晩以酒造

忠子の事

忠子の事

江南の孫破家の子をたて

これ水将水をも海にたて

あつた或も大樽をたて

これ一子将人海をもたて

後の忠子をたて

これ一子将人海をもたて

中へくけらるる

日月場秋まらるる

藤思

藤思水底の
多かり志り
ゆきことしめ

元稹詩

上卷中天地

乾坤外

越人依多利氏姓

越智越を浪士

尾名古底信

二季保王政高

け三

女房又法末の字の通はに

志りしつと

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

志り云々

同子女向を中上代の
まふふん世向まて
せんか上代を西
と一れん

は流いしわ
大坂市の人を
まかりし

花のあらはれり
よつとてくまは
量物を用ひ

鞆置、三歳弱、秋のあま

名をまよし、押さるる

入込、流初、涌湯のまらるる

中も、流初、まらるる、山伏

いふ事をも唯一方、流初

なる流初、まらるる、急げり

物ゆり、まらるる、まらるる

月足、流初、袖折、流初

水

水

水

水

水

水

水

水

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

水

水

水

水

水

水

水

水

二方田、流初、流初

流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

流初、流初、流初、流初

句のちりも歌まよわれ
由歌(三) 三つ(三)
おとこもよき世の極(三)
其女子の悠世をんま
とちり(三)もよき
か(三)もよき(三)もよき
悠世(三)もよき(三)もよき
(三)もよき(三)もよき
五(三)もよき(三)もよき
よ(三)もよき(三)もよき
植(三)もよき(三)もよき
北(三)もよき(三)もよき
又山(三)もよき(三)もよき

よ未(三)もよき(三)もよき
さ(三)もよき(三)もよき
双(三)もよき(三)もよき
か(三)もよき(三)もよき
中(三)もよき(三)もよき
象(三)もよき(三)もよき
あ(三)もよき(三)もよき
月(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき

了(三)もよき(三)もよき
華(三)もよき(三)もよき
に(三)もよき(三)もよき
い(三)もよき(三)もよき
三(三)もよき(三)もよき
と(三)もよき(三)もよき
中(三)もよき(三)もよき

了(三)もよき(三)もよき
た(三)もよき(三)もよき
一(三)もよき(三)もよき
三(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき
水(三)もよき(三)もよき
石(三)もよき(三)もよき

公明 十一
石破 十二

曲水十一

小東

おろろこにたは伊國風と記云るれつとておろろこ
よとてし又た伊の終山之麓をたつちし
されしつらつらしつらつらとて同様の事なれはつら
とてあつたつらつらつらつらつらつらつらつらつら
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

珍石

いろくの石もつらつらつらつらつらつらつらつらつら

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら 翁

偏橋乃の石もつらつらつらつらつらつらつらつらつら 路通

かろの石の石もつらつらつらつらつらつらつらつらつら 合

け茶の石の石もつらつらつらつらつらつらつらつらつら 合 碩

さむと美い月子物も 合

秀友の汗の跡
汗の跡
汗の跡
汗の跡
汗の跡

あふくやる秋の夕月をきく
喬友を白くしう胸中
うさし折里の糸丸の月の跡
汗の跡も汗の跡も汗の跡
免了や中意にともなふ
文殊の智慧も聖持の思慮
ふれ加城ふれもむすむす
何れもなきむすむすの跡
人兮人兮人兮人兮

枕子就汗の跡
おーかえたかえぬの
汗の跡を引る

あふくやる秋の夕月をきく
汗の跡も汗の跡も汗の跡
免了や中意にともなふ
文殊の智慧も聖持の思慮
ふれ加城ふれもむすむす
何れもなきむすむすの跡
人兮人兮人兮人兮

改改丸
翁一

歌八

若方十

越人八

君は絶の... かの絶の... 中んりの...
おれちんき... 絶の... 一たけ... 物...
とよま... 十... 鏡... かけ... 心...
ハ... 祇... の... 心... 物... 絶... の...

君... 絶... の... 中... の...
おれ... の... 心... 物...
とよ... の... 鏡... かけ...
ハ... 祇... の... 心... 物...
おれ... の... 心... 物...
とよ... の... 鏡... かけ...
ハ... 祇... の... 心... 物...

城

下の... 道を... 出... 事... 信... 切... 人...

武... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

砂... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

鉄炮の... 絶... の...
四月... 月... 日...

四... 径

砂の... 絶... の...
四月... 月... 日...

里東

西... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

泥士

中... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

乙州

北... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

怒誰

秋... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

砂... 頑

砂... の... 絶... の...
四月... 月... 日...

鉄炮... の... 絶... の...

砂... の... 絶... の...

西... の... 絶... の...

中... の... 絶... の...

北... の... 絶... の...

寂莫の苔の岩屋の
志片けきよ
其れ雨のふらぬ
りそあや

中	中	目	り	顔	馬	一	不	ろ
改	改	の	又	の	子	里	知	も
元	元	中	川	ね	衣	ら	も	も
子	子	ね	原	き	祓	お	も	も
好	好	ん	を	を	を	こ	も	も
も	も	ま	い	さ	う	の	も	も
を	を	さ	て	づ	わ	下	も	も
北	北	ら	と	き	そ	新	も	も
三	三	う	て	き	そ	野	も	も
里	里	と	て	き	も	は	も	も
東	東	ら	て	き	も	た	も	も
里	里	う	て	き	も	は	も	も
東	東	ら	て	き	も	た	も	も
里	里	う	て	き	も	た	も	も
東	東	ら	て	き	も	た	も	も
里	里	う	て	き	も	た	も	も
東	東	ら	て	き	も	た	も	も
里	里	う	て	き	も	た	も	も
東	東	ら	て	き	も	た	も	も

小籠にていじとし
もららの鏡まきし
蒼鼠の目まらむ
は除くしてさむれ
やうきあのじと
不厚矢の代り持廊の
引わらひももてし
持廊のついで
蒼鼠の鏡の縁か

雪	雪	を	月	暮	く	中	乃	吉
舟	舟	岸	記	一	夕	夜	之	子
子	子	子	は	夕	夕	夜	之	子
等	等	子	は	夕	夕	夜	之	子
河	河	子	は	夕	夕	夜	之	子
乙	乙	子	は	夕	夕	夜	之	子
州	州	子	は	夕	夕	夜	之	子
路	路	子	は	夕	夕	夜	之	子
乙	乙	子	は	夕	夕	夜	之	子
州	州	子	は	夕	夕	夜	之	子
路	路	子	は	夕	夕	夜	之	子
乙	乙	子	は	夕	夕	夜	之	子
州	州	子	は	夕	夕	夜	之	子
路	路	子	は	夕	夕	夜	之	子

後、羽衣、順徳院の
雨、皇太后配、海の付、
ふれ、鎌倉、と、り、
ひ、と、り、り、
和、出、買、の、配、衣、
何、と、の、故、也、

夕、か、く、り、新、き、を、ち、よ、
お、き、の、海、に、
は、ん、ん、ん、ん、
け、い、云、
小、姓、九、代、の、お、後、に、
日、本、一、ま、入、を、す、

大、田、の、飛、ぶ、
素、名、即、し、
又、園、を、お、し、の、
つ、り、

町、し、
配、衣、
た、え、
連、し、
こ、
農、の、
軟、こ、
夕、也、
菜、食、

怒、詭

配、衣、
た、え、
連、し、
こ、
農、の、
軟、こ、
夕、也、
菜、食、

泥、士

た、え、
連、し、
こ、
農、の、
軟、こ、
夕、也、
菜、食、

改、石

連、し、
こ、
農、の、
軟、こ、
夕、也、
菜、食、

里、東

こ、
農、の、
軟、こ、
夕、也、
菜、食、

中、徑

農、の、
軟、こ、
夕、也、
菜、食、

乙、河

軟、こ、
夕、也、
菜、食、

泥、士

夕、也、
菜、食、

怒、詭

菜、食、

お、お、お、お、
お、お、お、お、

か、ん、の、
早、も、
妙、を、
砂、を、
松、村、の、
田、の、

里、東

早、も、
妙、を、
砂、を、
松、村、の、
田、の、

改、石

妙、を、
砂、を、
松、村、の、
田、の、

乙、河

砂、を、
松、村、の、
田、の、

望、徑

松、村、の、
田、の、

怒、詭

田、の、

泥、士

望、徑 六
里、東 六

泥土 六
 乙州 六
 怒誰 六
 除破 五
 筆下 一

けつろ老意不憚
 の情を引かんとす

月あつたけを花作し

けり松の節をほろへる

色秋の意も年々て以傍

中川原をよそ意

彼杉火の燭をよそ

けり之を飛の毒氣を憚り

初をよそ

彼世の体をも人の杜撰

かわりかき

不詳

雜

けり老いしころあふる

龜乃甲意

牛糞

百姓の木

小舟

土

揚柳

乙四

取項

く車

探志

かた

正美

貴人旅りの

かやもこい 柳のの

板魚子 フノイロ白

若杉の地もさう

杉も若たさう

け 毎 日
使の者

秋萩の柳が子道ふ坊を元 及肩

風をよか減り去るの成り 明鏡

草をれをさるるは竹也 二鳴

さのゆゑあかすこの磨 乙州

た月をよ雛の若杉居をく 吹吹

ふり低くさるるをあらはる 月夜

山層のさるる思をさるる 採花

花をさるる思をさるる 月夜

衣をさるる思をさるる後

日和の地をさるる

蓋ハ 椀のゆ

ちのめはに籠り中

ちのめはに籠り中

楓竹のふしの記

花のついでに

ちのめはに籠り中

海入りの中をさるる月夜 正身

かきとふふふふゆりやまむ 及肩

蓋ももももももももももも 聖徒

ちのめはに籠り中 二鳴

ちのめはに籠り中 乙州

花のついでに 吹吹

花のついでに 聖東

花のついでに 採花

柳

心の中へ柳をうつこ
町からとふとふと
融解を防ぐため
とて
白くしてとて壺を
ふせ

春か佳の序に
月のことごと
昔はとてとて
おへ

月をえりり
とて
あ

夜い昔に
俗い昔に
とて

節い

節い

〜のちの葉流るるをよ

昌房

竹をよめる 春をよるに

白秀

水汲かたは 融解の融け

及肩

水汲かたは 融解の融け

野徑

春かたの序に 融解の融け

乙州

春かたの序に 融解の融け

臨破

春かたの序に 融解の融け

乙州

春かたの序に 融解の融け

臨破

眼をぬるも 春かたの序に

探志

春かたの序に 融解の融け

昌房

春かたの序に 融解の融け

正秀

春かたの序に 融解の融け

及肩

春かたの序に 融解の融け

野徑

春かたの序に 融解の融け

臨破

乙州

臨破

柳子の花

里東 四
 探志 令
 昌房 令
 正秀 令
 及肩 令
 野徑 令
 二喃 令

えとちあし

稲のふと田を

田の耐

代が男の

既

耐

角

門

か

一

入

田那

正秀

所 取 巾 有 凡 時 の 角 上 海
 以 此 の 二 意 を 此 等 の 款
 付 角 上 の 巾 や く 巾 上 の 巾
 か せ 元 取 巾 上 の 巾 字
 月 上 の 利 休 の 家 を 此 等 の 款
 夜 し 草 を 此 等 の 款

碩 左 秀 左 取 碩

秋凡とらこ
あつり 友禊
つしこまこ
まろくひ

ほけ ぼろの巻
けよのとれあ
しこほし
たすか件

とらこつしこ
片とくろ 木履とら
誓文とくろ ぼろあ
~~~~~ 侍  
ぼろいす 物不自内なる  
狐の想とくろ かわとや  
月あつら ぼろのまの  
無理とくろ ぼろのまの

間のおおむ

あいの山  
法りまの  
かま

あいの山 ぼろ  
重花 ぼろ  
火をとくろ ぼろ  
本本とくろ ぼろ  
羅後の ぼろ

蘇州とて拵たりとて  
いふとていふとて  
蘇州とて拵たりとて  
あつたもたつとて拵  
くつと拵つたの拵  
田舎と拵つたの拵  
おののち拵つたの拵

案と病人の拵と拵ふか  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と

江の国といふ

楓とて秋の拵  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と

江の国といふ  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と  
拵と拵と拵と拵と拵と

西川  
正秀 十九  
政政 十七

七部軍中

少卿かけろしけし

やこ  
こころし

寺町ニある

中野庵長兵衛板

桐如句

朝景乃忘

夕汲心泉

秋風を卑下  
こころし

小島の古事  
こころし

炭依序

此集を撰めり弘屋聖城村牛らとたて色紙の

よりとむ瓦を忘る心泉の泉ををきて

十所をあるのみらふの明ををけりあつた

我流のこころしをせり根の三子序を

大柳より炭をねり巻とれりはをけ

宋人の小亀うすいづま朱色をりこころし

子燧のまをりあつた照とて序を

粉の目蓋の目

砥石の目

紙の目

を紙に書かす

もつた目

さし目

王維曰

詩有聲画

画无声詩

毛詩正義曰

名篇之倒茶

無定準多不遇也

令屏の木の枝さよわらぬと云ふ事ありて

三人

さうらふ年に入るともさうらう秋の夜半の月

是の沈のちてつたうやれをさるるけのあり

乃つて年より秋乃月よりうらをぬあひ

わ、ゆゆの命をうて竟るゆゆのさるる

わつたふし是をひきみり有色の経をあわ

とれさるる又とぬよ床の節みさるる

頭をもさるる詩の心我さるる

源氏物語

巻のつた

さるる

誓願寺

酔醒美

らきり

らきり

らきり

らきり

らきり

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

何れもかきつたさるる

かた初をさよと題するものありし  
は、よきをいつく境もあらじ  
ほつき

元禄七の夏、同、つ、日、初、三、乃、素、終、也

百韻表十句の時を、右、終、の、表、六、句、の、表、を、通、日、を、た、り、あ、り、  
懐、殊、を、長、終、と、上、を、終、一、と、か、く、吉、成、に、終、句、を、下、り、て、か、く、も、  
遊、る、の、能、事、と、限、り、よ、し、候、申、上、候、を、候、を、か、く、し、し、  
り、り、き、り、付、い、吉、法、と、候、あ、へ、し、

吾、何、と、吟、の、時、初、の、花、あ、り、候、を、二、の、表、し、花、と、あ、り、し、  
け、何、と、花、あ、り、の、人、の、花、を、つ、ま、う、き、し、へ、一、成、り、申、上、候、を、候、  
又、亦、何、と、花、を、上、と、自、ら、ん、終、句、を、せ、し、候、を、二、の、表、の、花、  
お、人、に、懐、く、し、一、花、に、を、り、申、上、候、あ、り、候、を、自、ら、ん、  
候、を、お、人、に、懐、く、し、候、を、二、の、表、の、花、を、先、に、懐、く、し、  
け、亦、何、と、人、に、懐、く、し、候、を、候、し、

三、吟、の、時、を、二、の、表、の、花、を、候、を、候、し、  
形、體、の、人、に、懐、く、し、候、を、候、し、

けりて歌歌の平歌  
引の言と歌これ

きりくも七時  
うらたは山  
ふせきく

旅の神能  
おのの  
あつた  
は

誦諧炭俵集上巻

平白集

むらり  
白

三

とめりま  
心

と  
坡

ら  
合

と  
色

ふ  
合

と  
坡

山崎  
俗  
母  
胎

あ  
人  
人  
不  
人

あ  
坡

人  
人  
人  
人  
人

人  
人  
人  
人  
人

人  
人  
人  
人  
人

人  
人  
人  
人  
人

人  
人  
人  
人  
人

人  
人  
人  
人  
人

人  
人  
人  
人  
人

下地を念ふ布衣  
あまのけしきに弦を  
まわすこと

明日旅り  
旅の袖を  
はけて見ると  
兄のし

まつ原の桑色下地 ちるる足履 明城  
あまのけしきに 居るはのり 色  
所ありはらりと 碎てはる陰 明城  
門ておさる 毛とり念所 色  
東風に 書真のいさを 吹かす 念  
くく ちるる 眺わ 川ら 弟 明城  
江戸より たを ちるるの 言を せられ 念  
と地も しの けしき 色を する 明城

おやこ 歌とあつた 歌の事 中国の 淫言  
おやこ 何れも こと 年よ ぶし

おやこ 歌とあつた 歌の事 中国の 淫言  
おやこ 何れも こと 年よ ぶし  
おやこ 何れも こと 年よ ぶし  
おやこ 何れも こと 年よ ぶし  
おやこ 何れも こと 年よ ぶし

桐のち ちるる 月さゆりし 明城  
會林説話 門前 愛辰 五月  
若くして ちるる ちるる 色白く 念  
りり ちるる 色 念 明城  
まつ原の 女房の おやこ 振舞も 念 念  
又と ちるる 色 念 人 明城  
法衣の 色を 送る ちるる 念 念  
たはるるを下して ちるる 出来 所 城

一 本館遊史曰、皇女、皇孫、之後、宇多布山、皇女、任、後、門、任、帝、崩、後、皇、孫、  
在、遊、史、又、皇、孫、和、高、村、皇、孫、阿、保、年、後、運、其、在、相、比、世、社、之、傳、教、  
四天王

七 原凡の自奉て  
感者古く御あり

と乃來り来り方々、意を以て、  
原凡の自奉て、  
感者古く御あり、  
子とく、啼、一、  
未とく、二、  
原凡の自奉て、  
感者古く御あり、  
子とく、啼、一、  
未とく、二、  
原凡の自奉て、  
感者古く御あり、  
子とく、啼、一、  
未とく、二、

殿山、世傳、西、皇、女、の、位、辭、又、皇、孫、  
成美曰、  
一、  
成美曰、  
一、  
成美曰、  
一、

嵐雪

後、  
江、  
多、  
子、  
利、  
牛、  
坡、  
空、  
生、  
坡、



下地を心うすし  
深きくを深き  
仕ふれこむさあ  
一名深澤

皆洛東

ツナ又々い雪書  
衣いこむを  
穴水てゆ

古事談、牝牛の乗車  
月いも牝牛役  
有、新役牛より今  
いふかも難役と云

深澤をちよいり  
あふこもけれい  
隣りる路に嫁を  
ていりい  
忍谷のれり  
又右のうを  
洞ゆきりい  
人ッマあふぬ  
松馬ちこ

あふこもけれい

隣りる路に嫁を

ていりい

忍谷のれり

又右のうを

洞ゆきりい

人ッマあふぬ

松馬ちこ

新役乃騎を下せし  
えーの中なる  
漸と内陣や  
勢臨み  
春よりね  
抱揚る  
心み

えーの中なる

漸と内陣や

勢臨み

春よりね

抱揚る

心み

心み

町

鹿

利

町

鹿

利

町

鹿

六  
小春を照すれも秋の  
ついでに秋を照すれも  
昔人の言の如く  
あつたをいふは

小春の如く秋も  
二句在り  
コトリツカに  
十とて師記  
人の杜撰

七  
けふは仙角の旅も  
消えて去る  
流に人の心  
年較えこれも  
いよと秋をゆく

六  
塔の如く眼り世に成り

こゝろの如く眼り世に成り

しを仏の如く眼り世に成り

はこいあいの如く眼り世に成り

春の如く眼り世に成り

一と場の如く眼り世に成り

七  
少の如く眼り世に成り

今と夜中の如く眼り世に成り

いよと秋をゆく

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

賣の如く眼り世に成り

りりしとゆより眼り世に成り

隠合の如く眼り世に成り

りきまの如く眼り世に成り

独ある母を眼り世に成り

かき 饑乃とほ正月の眼

利牛

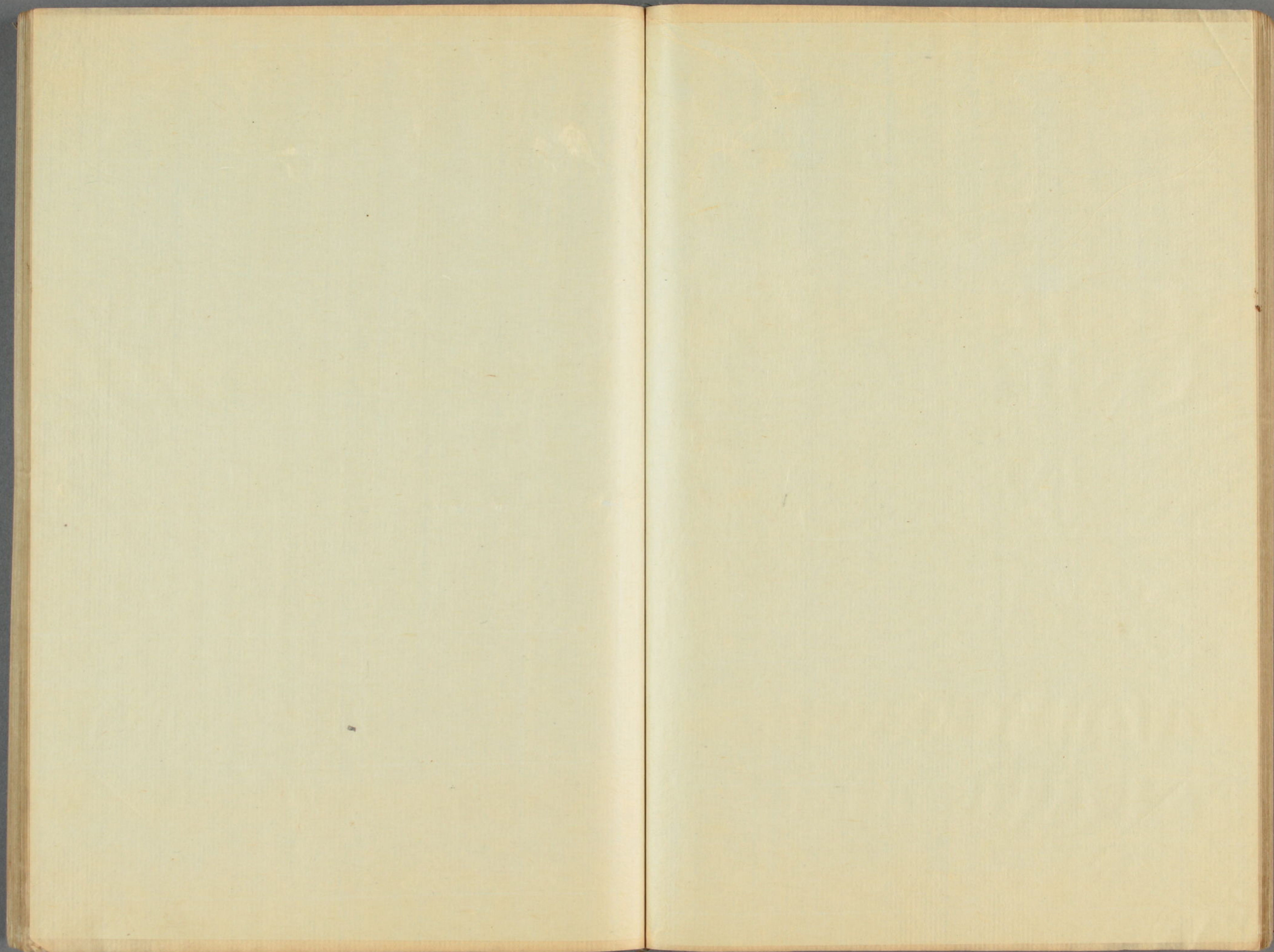
利牛

利牛

利牛

利牛

利牛



ふ川はさかりて

孤屋

こまを乃をさきききる麦の縁

屋の氷跡のそと清川

上法を通さぬほのふ陣て

そつらるけい海の家の中

三府ふと坂もたて長ぬちの月

とさりし坂のころよあきこも

こ流す秋風  
やうてまうしは  
こ流す下り坂もたて

き屋  
谷水  
利牛  
三屋  
孤屋

坂の横ふともくさつてたて坂のふらふのふちふち

ふりくは流の下のうらもて

吹り伝ふりりこまをさし

姓もふいふくもくもくも

信都のまき先みをや

風物う秋明ふはの吹き

木葉のたけれとあきをたて

銀汁わなぬあきとさき

ふちの葉をさきとあきとさき

娘信都  
流し物後  
代し  
一巻のうら物後  
の信都も一日  
つたき

利牛  
谷水  
孤屋  
き屋  
利牛  
谷水  
孤屋

ちろろ坊々  
 龍坊々々々々々  
 若一龍坊々々々  
 海ちんをさす  
 ちろろ坊々

こりまゝさやまの節ある 利牛  
 うれい坊々を今にやえ 愆水  
 雲うね吹さるゝ織る 孤辰  
 平し丸くてたけおとまを 益  
 石原子隣り中乃わたりたり 益水  
 ちろろ坊々をさるゝあゝ 利牛  
 泣き声のりさるゝお新 益  
 こそこらとさるゝか 孤辰

乙のこいばいんておまへに行まゆ 利牛  
 ちをほりりま 益水  
 今乃らゝその原はをまゝて 孤辰  
 ちをほりりま 益水  
 島や耳 祝文乃ちよりのまゝに 益水  
 坊々なまゆ 七よりの 利牛  
 名月のうたにふたふた 益水  
 ちろろ坊々 益水  
 孤辰



百韻

利牛

子と 謀みとて 子高舟  
 きーの いらり 白に 咳  
 りあり 珠粒 妙の 時を  
 しか所 ちとよ 肥く 能  
 等行 ちよきの 神た ちよ  
 了り 妙き ちわき 人き  
 利牛 利牛 利牛 利牛 利牛

とよの 禰

びり 杜南の

事 ちよ

ささ 只 農人

とよ ちよ

風 伝

眼 ちよ

ちよよよ ちよよよ  
 けりよ ちよよの けりよ  
 ちよよ ちよよ ちよよ  
 ちよよ ちよよ ちよよ

評 二南 記云

松坂 ちよ川

人の ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

今 ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

おれ 月 ちよ ちよ

邪 ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

ちよ ちよ ちよ

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

舟の衣裳をくちあなつ衣裳  
あふくし本をけりし  
あなつ長衣をきつる

長衣のタ、ヨシハ

二日月十日

うらの洞にけりし塔  
あふくし表衣律呂

ふもりの只衣をきつる

あふくし又の只衣の依  
行をわたりしあなつ  
いらの洞にきつる

びこ云

湖をこけりし漁人の洞  
を海のこけりし

ロリあなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

只あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

天、あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

舟の衣裳をくちあなつ衣裳  
あふくし本をけりし  
あなつ長衣をきつる

わくわくあなつ衣

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

あなつ衣、あなつし 舟の色 孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰

孤辰





あつちのあつちのあつち  
たつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち

弦打山よりお祈り  
凡そ弦打お祈り  
弦打山ハ

護法國神の浦

夜起のあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち  
あつちのあつちのあつち

蛇 志はるの蛇を尻子に捕へり  
十日巳未より子未  
月 志はるの蛇を尻子に捕へり  
弦 打山よりお祈り  
棧 娘能いことを尻子に捕へり  
小 志はるの蛇を尻子に捕へり  
極 志はるの蛇を尻子に捕へり  
錫 志はるの蛇を尻子に捕へり

二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり  
二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり

麦畑の留地より信牛杭

お母も子持もあれはたれ  
又 志はるの蛇を尻子に捕へり

又 志はるの蛇を尻子に捕へり  
又 志はるの蛇を尻子に捕へり

二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり  
二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり

二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり  
二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり  
二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり  
二尊院 志はるの蛇を尻子に捕へり

滑浪

ノ治ノ心ニシテ

計終る回

半夜利ノ振替ノ言

ふるく一振替ノ言

半夜利ノ振替ノ言

かすくたす

振替ノ言

ふるく

龍川ノ振替

同ノ言

新ノ一ノ振替

新ノ月

坂

なりくくくく 家ノ

七ノ

利牛

めを終る言

坂

又たノ一ノ

坂

一ノ一ノ中

利牛

入ルノ人ノ

坂

もう一ノ

坂

内柔

利牛

とくしは... 正月ノ...

武修

くしと

い

國

丹

大

丹

丹

行

坂

水

坂

節

利牛

飛

坂

お

坂

入

利牛

抵

坂

あ

坂

詞

何年まで掛かるといふ  
久しきに亙る

投てきのついで  
いふ言ひはうらやま

順礼引  
お前さん

大水乃あけく、畑乃砂のけりて 利年

何年 言提しをぬ 柄の本 孤屋

髪をまう回んうちをく 建 明坡

丸の中、強さをわ月、うら 利年

投折もさうとてまじりて 孤屋

足折一茶盛よりかゝるあさ 明坡

里路と順礼引のふりてまじり 利年

中へくもあを嫁の禮り 孤屋

朝の志すは朝の心と朝の志すは朝の心  
まよふかゝるといふこと

行老を改め老を改め  
いふ言ひはうらやま

おれを供あふ  
おれを供あふ

おれを供あふ  
おれを供あふ

おれを供あふ  
おれを供あふ

おれを供あふ  
おれを供あふ

おれを供あふ  
おれを供あふ

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 明坡

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 利年

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 孤屋

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 明坡

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 利年

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 孤屋

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 明坡

おれを供あふ 朝の志すは朝の心 利年





天  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

梅  
しんせいのうらなひ

地  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

梅

天  
梅  
しんせいのうらなひ

霞  
しんせいのうらなひ

地  
しんせいのうらなひ

曲  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

支  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

土  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

利  
しんせいのうらなひ

きんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

游  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

明  
しんせいのうらなひ

梅  
しんせいのうらなひ

杉  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

梅  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

中  
しんせいのうらなひ

梅  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

切  
しんせいのうらなひ

梅  
しんせいのうらなひ

しんせいのうらなひ

切  
しんせいのうらなひ

治まの又りこり

あし

都のれこり

大州の志

石はあを

りこり

はるかに

上野原一廻り

統月一足つもわこり

去来

大系や塔のこり

文44

おほら月やこり

仙名

深川乃守

長閑さや空のゆるり

利牛

十のこり

之坂

栢の志初ま

中坂

ねこり子り

キ角

寫

元

文のこり

りこり

石はあを

都のれこり

大州の志

統月一足つもわこり

文角

おほら月やこり

桃隣



くさくさわんをたたく巨磨を  
明城  
さうり一たりも念をいり  
利年

柳

亭  
木陣の柳の本

亭  
こわくをいへうと城の柳を  
湖を

柳の本もへらして  
地をいっかきふま

柳  
陰子こし月のさむく守柳は  
素説

利  
五人松が住み入る

柳  
五人あそびてまゝまゝ柳丸  
明城

夜をまゝいっかきふま  
五人松が住み入る

亭  
鄙の懐紙  
西中とこいふふか

女起るの辰をいふ身まゝ柳は  
一風  
今年、柳をいっかき  
さき  
西中とこいふふか  
宿の柳は  
利年

椿

去々ともろ管箱より也  
椿丸  
如底  
松をいっかき  
柳は  
湖を  
人心入るをいっかき  
椿丸  
曲翠

旅よのしをかみせて 花つをまり

ふりも 花つのまりの花つ

をまりの花つをまりの花つ

花

いりあふしをまりの花つ

かきつはわよもはいちやうのし

たしまいしあまりの花つ

柳ヤナギ

柳ヤナギのし

しの花つ

花つのまりの花つ

花つのまりの花つ さき

花つのまりの花つ 花つ

花つのまりの花つ 花つ

花つのまりの花つ

花つのまりの花つ 花つ

花つのまりの花つ 花つ

花つのまりの花つ 花つ



上

市行しついのふりまほすは 治徳

吾舟よあまやふしむのたのむ 北津

ふらふの神つらき秋の終 中角

鬼乃子ん解を居もてふあふ 如行

日半<sup>ナハ</sup>終をてふまはりのむ 野坡

社<sup>ツチ</sup>の住ぬま終を 利牛

若柳やつらふの白かくりのむ 孤尾

淀舟

鬼の子ん終  
あまこ

吾柳の住ぬま終を 終

歌

ほくくく吾の涙うまきせ

あいのまきふつふつ

あいのまきふつふつ

こゝろ

淀<sup>ナカ</sup>つらふ今下りてま 小あゆは 乃

吾舟や柳のあふつふ尾ねの酒 終

あま終るつらふの<sup>シバ</sup>あまこを 子 綱

ほくくくくみ鏡門のあふは 思 誰

あつたやけろ環中風の未

イカ 熊 鮠

三才あふきまねわの吉の尾止

仙 華

旅りこし

法夜場の極う内いすれ止

野 坡

此集い軍ふの紙尾旅

戸つらりりり 忍川を以てして

吾らるるこすしわもわろし

野 坡

柳さくさくわくわくさくさく

利 牛

夏款之款句

首 夏

晴るもの雲にけりし衣之

嵐 堂

衣之十のさやい高きり

野 坡

節をゆ様ねをせり衣之

丸 節

こころやわさびわ 衣之

雪 走

花のあけけいりりりりり

子 珊

夏口款句

尚云

こころよそを

いさやあいら

こころよそを

扇 扇のりゝゝゝ 巾 衣之 利牛

扇をのりゝゝゝ 扇のりゝゝゝ 巾のりゝゝゝ 衣之のりゝゝゝ 利牛のりゝゝゝ  
扇のりゝゝゝ 巾のりゝゝゝ 衣之のりゝゝゝ 利牛のりゝゝゝ  
扇のりゝゝゝ 巾のりゝゝゝ 衣之のりゝゝゝ 利牛のりゝゝゝ

卯のそやゝゝゝ 起柳の及こゝゝ 芭蕉

いりゝゝゝの絶乃たゝ之雪のつゝ 玄来

旅川

いりゝゝゝにそゝゝのりゝゝゝの起乃たゝ 許ニ

扇 扇のりゝゝゝ 扇のりゝゝゝ

卯のそゝゝに起乃たゝのりゝゝゝの起乃たゝ 玄考

扇のりゝゝゝ

梓乃款をわゝり涼のりゝゝゝ 湖春

幾乃款をわゝり涼のりゝゝゝ 孝を

いりゝゝゝのや竹の子殿に花を竹 芭蕉

扇のりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝ

二題を記す

扇のりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝ  
扇のりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝ  
扇のりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝのりゝゝゝ

郭公

アヤシキニハナシク行ク  
枕邊

アヤシクハニハナシク行ク  
其角

川邊を月の秋に  
嵐を

廻り廻り  
杉花

本心  
古寺

アヤシキヤ  
子紀  
孝純





火取の世ゆく故に今も西岸つとけし

旅人といふ者今年いふ人取をばせて習ふといふは約稿といふ

### 瑞子

いふこと

旅人いはずは田舎をたし 五月卯申年に行はるる小人取 其角

任をもと紀州根草を さしよけて 対もわちつきの凡そ 酒を

の傍徒の根草を再世を ちよとて ちよとて ちよとて 桃疎

右旅人といふ 又もあゝいとち 棕あ肥 嵐を

三保右方月が みとりわを首の骨を甲を丸 仙衣

いふこと 惟子のちよとてけし 詠子 素籠

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

いふこと

### 棕あ肥

ちよとていふこといふこといふこと 貞徳

ちよとていふこといふこといふこと 夏旅

ちよとていふこといふこといふこと 外言

ちよとていふこといふこといふこと 斜旅

ちよとていふこといふこといふこと 豊河

ちよとていふこといふこといふこと 結確

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

ちよとていふこといふこといふこと

五月丙

此川、水やとあうけ、丸木松 赤松

ろろりり色やと、川和川 松磯

は、れよ小船を、にき、子魚魚 明坡

ろ、ろ、川中、あつ、毛、少、も、ヤマニホシ 高陸 嵐南

あ、の、り、り、松、陣、ま、か、て、り、ぬ

は、り、り、や、静、松、も、あ、り、り、松 松水

原

横竹やき方言に 川中の句と公羽 さま 是

と、あ、り、り、松、も、あ、り、り、松 せ、り、あ

松、も、あ、り、り、松、も、あ、り、り、松 卯、七

松、も、あ、り、り、松、も、あ、り、り、松 探、ま

松、も、あ、り、り、松、も、あ、り、り、松 知、月

松、も、あ、り、り、松、も、あ、り、り、松 元、年

きーは中は海の小の波々々  
みよしとあふふ石のりりり  
三月の鹽とすも ぬん  
きき

帯のまゝ服身めか  
してよきおれ  
右も左もしくりし  
自由さあ

きき

橋中さあおのり  
りりりりりりりりりり  
世の中はさあおのりりりり  
里左

乃一むきとりえ中  
のきき

肥心さげし  
山仰あ  
巴御あ

あこ女こら  
あろろろ  
山元

水雲の何  
池のうら  
るるる  
行菜

やまのあも  
ひりりりりりりりりりり  
とえし  
曉のりりりりりりりりりり  
ちをのりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり  
仙花



六義の詩の起るの事

詩は凡そ賦比興を以て三義とす。凡そ諸國の風俗  
男女老幼の情を詠するの詩。四は凡そ體物  
凡そ物(物) 詠を 朝廷の郷土又下を詠する詩  
古より體物一の事詠(物) 賦(宗廟) 詩  
祖考を以て福祿を請ふの詩(賦) 頌(宗廟) 詩  
詩の全體を以て賦比興の三義とす。賦は宗廟の詩を  
三義とす。賦比興の三義を以て詩の全體とす。賦は宗廟の  
詩を以て詩の全體とす。賦比興の三義を以て詩の全體とす。

六義とす。三義とす。凡そ諸國の風俗  
男女老幼の情を詠するの詩。四は凡そ體物  
凡そ物(物) 詠を 朝廷の郷土又下を詠する詩  
古より體物一の事詠(物) 賦(宗廟) 詩  
祖考を以て福祿を請ふの詩(賦) 頌(宗廟) 詩  
詩の全體を以て賦比興の三義とす。賦は宗廟の詩を  
三義とす。賦比興の三義を以て詩の全體とす。賦は宗廟の  
詩を以て詩の全體とす。賦比興の三義を以て詩の全體とす。

ひら

二五我の事知得叶ふ  
やう人の尸取らるる  
はるりささよふあり  
こゝれをぬゑん  
こゝれをぬゑん  
やうれいそ 警きん

誑諧炭俵下巻

穂之部

秋の阿なれつれつの中、  
月を歌ふ村俵の所を  
えつる

名月

明月や又つらも秋の夜下  
名月や極つらふさるの庭 カ  
桑宮をこゝへ 又初月おる 荷今

や初を御初ふり  
初を初を初  
水のふよふり  
そを(魚を)入る  
海申とらり ね  
海を魚 撃まはる  
たのふらふら 何せを  
魚を採 料理を  
中初初を初を  
る採てこち中り  
魚を採るこ

名月や 秋の夜下 酒き  
初を初を初 初を初 軍在  
大は 月の初めは 利年  
桑宮をこゝへ 又初月おる 尺角  
あつたの月を  
あつたの月を  
あつたの月を  
あつたの月を  
あつたの月を  
あつたの月を

秋下

明月や 不にふりしす  
多就







車志

言垣や三社

木三社

乃付新居の都

もももふふとい三社

三の垣のり三社や五より秋の志

北條

為とくそとく一カや打とく

聖言

行足り三社や川ちす福の志

松館

マのり徳や白松場、五とく

又子

あつとく

アのり松とく若うつとくや五の志

志子

女中の車志

車志のりやの志の志とく

共角

園志

志木畑や、あつとく此とく

杉凡

何とくも志子とく五とく

松館



あまたいーいれくせなそん  
 たまはくろく笑つて舞のこたふり  
 子づつれしていんふだのひまうほ  
 みさくれとふふなまきやのこいよや  
 んをいれおたももわつひまうほ  
 おなまもこをいれくせなそん  
 頂上とせうまういんあしん  
 ちつての海まうけちのち  
 小書こころぬ一本られてふし  
 ちつてのちつてのちつて  
 ちつてのちつてのちつて  
 らるるるるるるるるるる  
 いちちちちちちちちちち

7  
 ちつてのちつてのちつて  
 らるるるるるるるるるる  
 ちつてのちつてのちつて

石

ちつてのちつてのちつて

ちつてのちつてのちつて



久く之部

初め

風や 沖よりさあき心乃丸（ワタリ） 虫角

市カヤ木の葉もコナ下丸 桃疏

を枕う 破りきりさけり 毛急

ささくもや 流流まきり 木指 文望

松りあがりきり 川きりや 杉子 斜辰

石鏡（イハ） 冠（カ） 帝（ミ）

冬部

南宮山々

員法固し

ふふり中

金山表命也

刈草まのありの 葉を落し丸 桐き

こころのそまよき 小カ出ル 海季

初霧も 梅のをもも 草（クサ） 不（フ） 杉丹

木枯に 彫（ウツ） ちげき 梅の 白 八桑

市言心と詩也

こころの根より 杉皮丸 桃疏

常山より ちげり 流流のささくル 樹力

時百

平治の夜へらりし外なる 新口

ふらふら 伸の町つりしん 大竹

まき 藤の葉 花のまき

ゆふの夜にふらふらつりしん 新口

を明ししれは 夜にふらふらつりしん 許

天不

ひらき 宿をなすいりし

あき 宿をなすいりし 陣の宿

旅の宿

旅の宿 陣の宿 陣の宿 陣の宿 陣の宿

許六日 陣の宿

大根引 陣の宿

大根引 陣の宿

大根引 陣の宿

大根引 陣の宿 大根引 陣の宿

大根引 陣の宿 大根引 陣の宿

大根引 陣の宿 大根引 陣の宿

はむさ ま下りま字  
すくて

人々の秋すまをさるゝ空まらぬ 地坡  
こみひきま先埃好もさあさる 示碑  
吾も夏切のぬおもふき 家まらぬ 利牛

何事もあらずに空をさるゝ月 秋扇  
魚の秋やまきうきまの月 早東  
右の二つをふくむの秋

まきうきまの月  
秋のまきうきまの月  
かゝるまきうきまの月

雪

ちうきよとふくと歌をさぬり 北坡

神をりえりやふりあそり 利牛

ちうきよや城のちうきよの上 貧山

ちうきよりや歌かきりてみさるわ 依

ちうきよりやうやうきよりや 振雄

ちうきよ 江州甲斐郡

弘徳名所

新古今

約して神と料ふ

かけもふ 依り

ちうきよのちうきよ

雪水御

ちうきよを綴りて 依り 依り

ちうきよや依りやうきよの約 心枝

ちうきよやえりやうきよの 許六

依りや依りやうきよの 柳月

依りや依りやうきよの 乙明

依りや依りやうきよの 依り



題石知

火焼

庭燈の遺風

九月月詠社と於て

これを修む

古より此社に於て

此社を修む

此社を修む

此社を修む

これと申す

うさしこの物に於てこれ等と云

室を修むや新棟のいふ所の修

福門の葺き替へられたる下迄に

此火焼りや物と云ふは修むと云

白くそのを修むと云ふは修むと云

此等と云

見立各口より菓の

汁の由を焼く

と申す

此の火やあらきと云ふは修むと云

此中や此に火焼のあらきと云

此と云

此に於て修むと云

此中や此に於て修むと云

文 44

修 吉

其 角

合

しんせき

燦たるまこと 桐つらふらふ子 音意

ちんせき 一をたふたふ代山 下字

瞬つちて 絞さするま 絞流 世岐

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

竹まや水まや ちんせき 知月

せしれ 匠元宗長

ちんせき 一 甲 子 卯 の ちんせき

山 山 山

けい云 此トヤセトハ只 杉風

けい云 此トヤセトハ只 杉風

甲 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

甲 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

甲 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

甲 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

右の如く  
中  
た

き  
六  
中  
た

り  
中  
中  
中

上

これこそ角のついで  
信徳

名懸玩の一を  
こゝかに嘆く

位印をさしこむ言の  
ついでに

これのりくおきて  
はるる

おののちらひも  
ふりま

わん

けのちのついでを  
そとに

詠諧秋之部

其角

秋のき尾とり杉をさるる

おれして一羽海やうる

秋のき日備折る貝吹て

月の影に籠りの門

秋のきより火柵もあすを

ついでに丸をさるる

孤尾

其

其角

其

孤尾

口麻を二枚を

テウワセとさるる

た麻に双方を

分せし門ふり

ついでに句の尾の

孤尾

けりし調を

うら

あまのきをさるる

編みの糸のついで

おろしてさるる

あまのきをさるる

下をさるるのき取て

坊のきをさるる 表をかりて

きかすのきをさるる 下り

あまのきをさるる 計

田の時よりあまのきをさるる

あまのきをさるる 表をかりて

いねのきをさるる 計

ついでに物さるるの月

其角

孤尾

其角

孤尾

其角

孤尾

其角

合

成美云大井川の幸

序記云々

いそぎに水原の代  
もけれはつらき  
おきくまをこころ  
おしんすいんきぬ  
秋もいそぎとむ  
とし月の桂のれ  
玉の松原より  
みよとよをいそぎ

次のあそび  
娘のいそぎ  
お治拾遺

さき繩の結むすきこれいそぎ

孤辰

乃う下さる花あるいそぎ

孤辰

あそぎの枝は桂のいそぎ

孤辰

こころいそぎありいそぎ令いそぎついそぎふいそぎたいそぎ

孤辰

こころいそぎありいそぎ令いそぎついそぎふいそぎたいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

いそぎ  
いそぎ  
いそぎ

いそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

孤辰

あそぎのいそぎあそぎいそぎ

小梁よむ行言アせてと云じ 世角  
おしこ

説法浄瑠璃の双ありりおもふらうらうら  
をくつり別友と標題し  
一万倍より下をを  
孤屋縁をりをを

はなむとせんとを  
取の中しにらうら  
ふかけとせし  
これおらふとまを  
はなむとせんとを  
今月おはるし  
はなむ

拾遺抄の巻  
天竺代具川  
地保

拾遺抄の巻  
地水火風假名  
言と説いて  
たきし拾遺抄の巻  
らんらんらんらん  
八月おはるし  
拾遺抄の巻  
洞窟らんらんらん  
はなむとせし

利年  
地保  
地保  
利年  
地保

あんを何ぞし

長春の山の里

馬や里の瓜の

名あり

分ふを買姑

隠所てお

えんありいんり  
こいふ言い

あつめの修証し

正の証云

よふふと平らふを

職きし平地

つよそふ平地

をく様

大田

よふ平地を

いもわ平  
地と改らひ

瓜のまをうん

通くし所を

あふりこを

いつし

をるふり

分ふあり

えんあり

改ら

桃

地

利

地

地

利

地

地

町

町

人の

むら

よふ

むら

食

改

利

地

地

利

地

地

利

地

火柳より来て  
何れもいふふく  
これこそおぼゆる  
しるし

たかしどんこれぞ  
しむこれいふぬ  
あはれ  
信よえとふ  
おん

持津島  
巻目

しるし  
これい

い夜の手書き  
秋の  
地

杉の木  
月  
利

つる  
あ  
地

と  
た  
地

よ  
た  
利

ま  
あ  
地

帷  
あ  
地

る  
あ  
利

焼  
あ  
地

信  
あ  
利

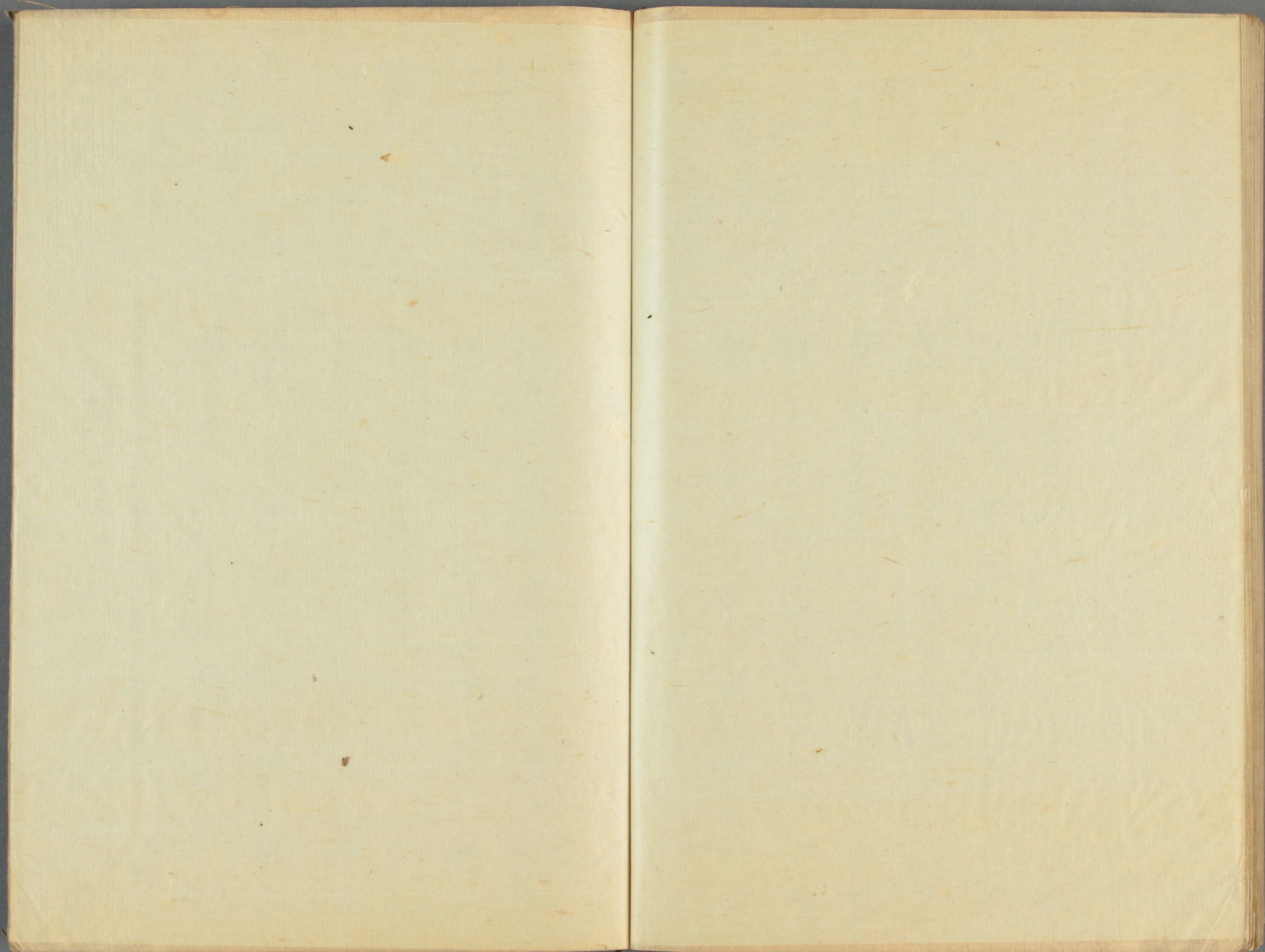
あ  
あ  
地

先  
あ  
地

い  
あ  
利

う  
あ  
地







ふとせぬのいやしおれ  
二五本を刻む也

市一の水口海  
水の中へ橋を架けし  
太くいゝとぬはし  
何よりいゝよしん  
海はよきとす

船 船 食うヤ 中 たりをきつて 利牛

坂上門あり 百人 百十石 弘辰

比ららの隊 百人 もを 始 弘辰

砂 百人 ぬき 百人 弘辰

新 百人 あり 善も 弘辰

吹 百人 ぬき 百人 弘辰

川 百人 越の 市一 百人 の 弘辰

千 百人 比 百人 の 弘辰

十 百人 把 百人 を 百人 の 弘辰

治 百人 も 百人 を 弘辰

等 百人 月 百人 に 弘辰

又 百人 千 百人 一 百人 弘辰

そ 百人 の 百人 弘辰

を 百人 の 百人 弘辰

中 百人 弘辰

登 百人 弘辰

形

あ 百人 の 百人 弘辰

俗 百人 弘辰

程のゆるい水字  
ふくくーおのれ  
もあしーさ

ねちま

ふくまの(三)

羊の揚場  
おろし

風おこす 秋の終り 麻さしり 利子

雨の 雨子 雨をひくゆら 砂屋

ちんぼろと 羊の揚場のり 菅草

田んぼ ちんぼろ 雨をひくゆら 地味

どこかおまの 月 中 何ふ 砂屋

揚場の ちんぼろ 雨をひくゆら 利子

洞床 揚場のり 麻さしり 利子

色蒸

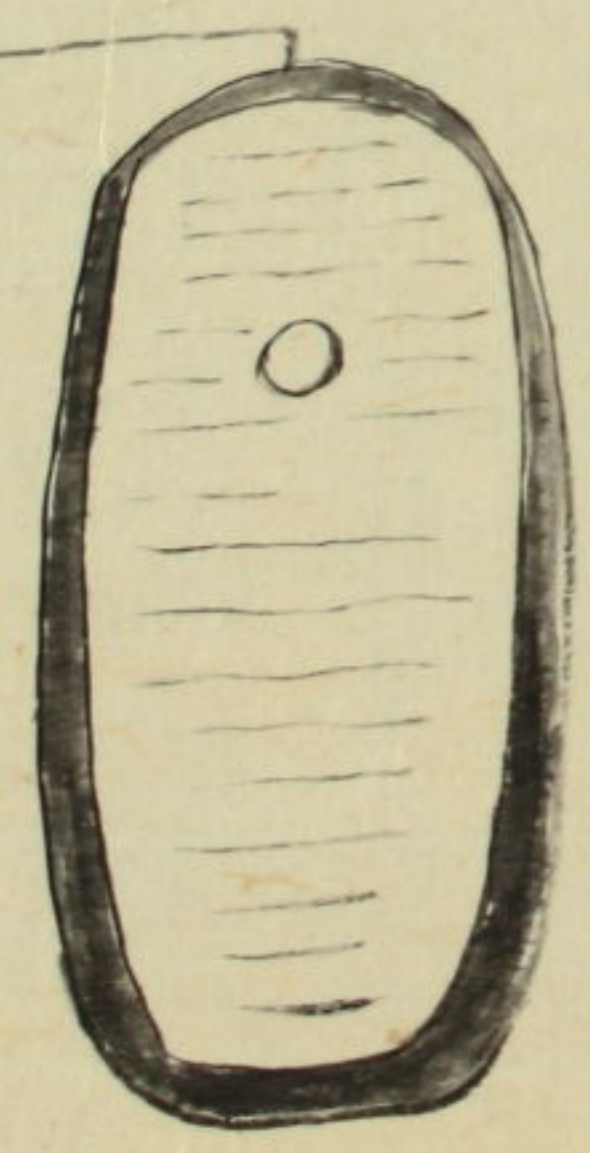
地味

砂屋

利子

古れり

長一尺余



口徑四寸余

補壺は俗に焼くと窓口の  
をくくく 穴は穴と  
はけて 白く 陽を  
照らす ぬれり  
ぬれり ぬれり

口  
信  
集  
好  
ま  
ま  
り

二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

生  
ふ  
成

杉民

雪の松葉を口づかすは常葉  
 回りとよまへつあきとて  
 下り葉を一夜に干しぬ  
 あつとまきしと大なる徳  
 ちりちりたる風もふりし月夜  
 粟をこねてて五石を多し  
 利年 松葉 子 芭蕉 狐尾

何と云ふの附ゆふと  
 此の人のくさしとて  
 猫の子のくさしとて  
 ふんふんとして上り  
 子しりしとてくさし  
 竹の皮を剥きし  
 とよまへつあきとて

松谷の堤をたふす 秋のふ  
 ぬれしうらまへ 銀葉の  
 猫の子のくさしとて 狐  
 ふんふんとして上り 松  
 子しりしとてくさし 竹  
 竹の皮を剥きし 杉  
 とよまへつあきとて 石  
 子しりしとてくさし 利  
 子しりしとてくさし 年







沙おと 佛標の  
一白  
おさる 孫とよ

おさるの孫とよ

さしぬゝあふのりぬのり  
次のぬぬ <sup>吐</sup> つつあきと声  
おさるの孫とよ ぬぬのぬぬ  
七つのぬぬ ぬぬぬぬぬぬぬ  
ささぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
男ナリーリとささるゆり  
おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ

おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
おさる 子 利子 ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ

撰者芭蕉門人

友在也

野坡

上泉也

孤瓦

池田也

利寺

元禄七歲次甲戌

六月廿八日

